

いの町地震防災マップ (伊野地区) 危険度マップ、液状化マップ

○危険度マップとは

危険度マップとは、ゆれやすさマップに示されたゆれ(震度)が発生した場合に、建物の被害がどの程度生じるかを相対的に表したもので

このマップを参考にして、自宅や学校、職場など、自分や家族が暮らす施設の安全性を考えましょう。

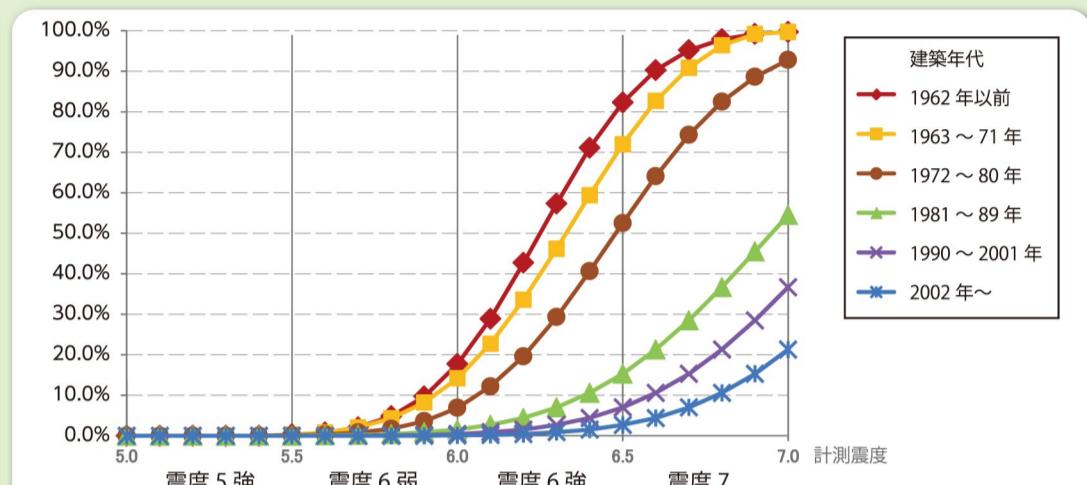
また、建物の中や周囲の危険箇所もチェックして、家具の転倒防止やブロック塀の補強にも取り組みましょう。

○危険度マップの作り方

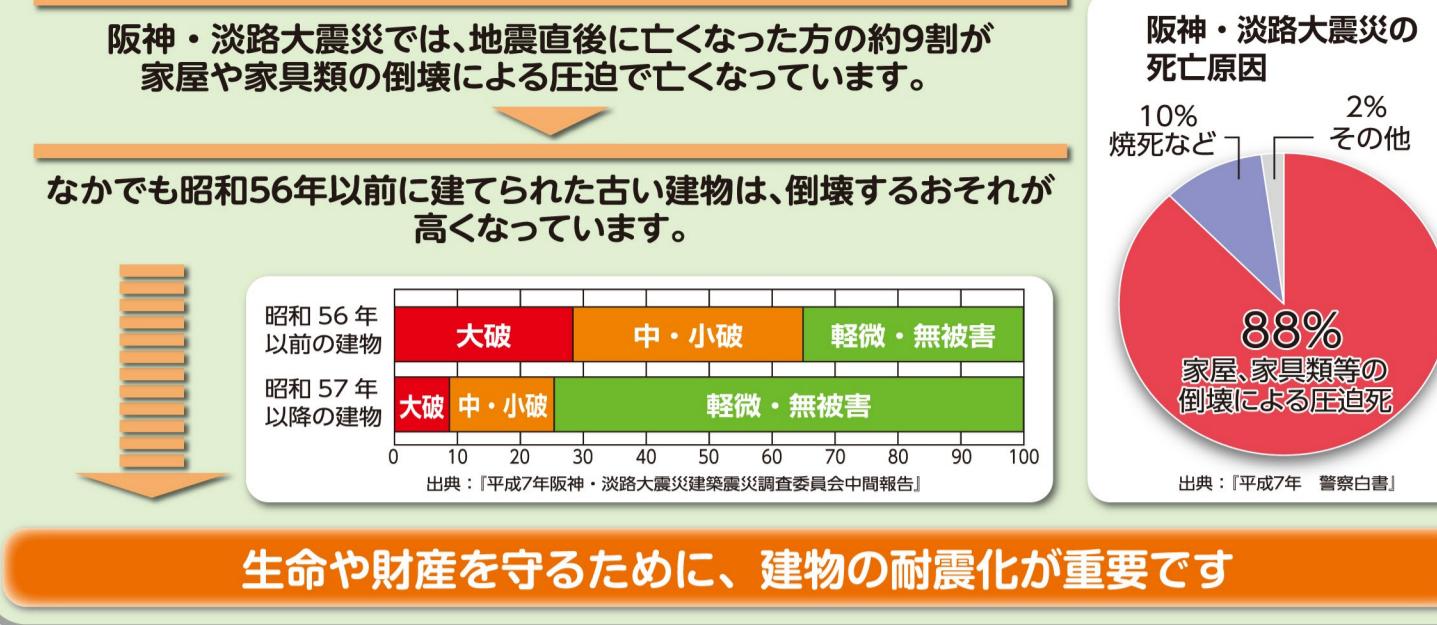
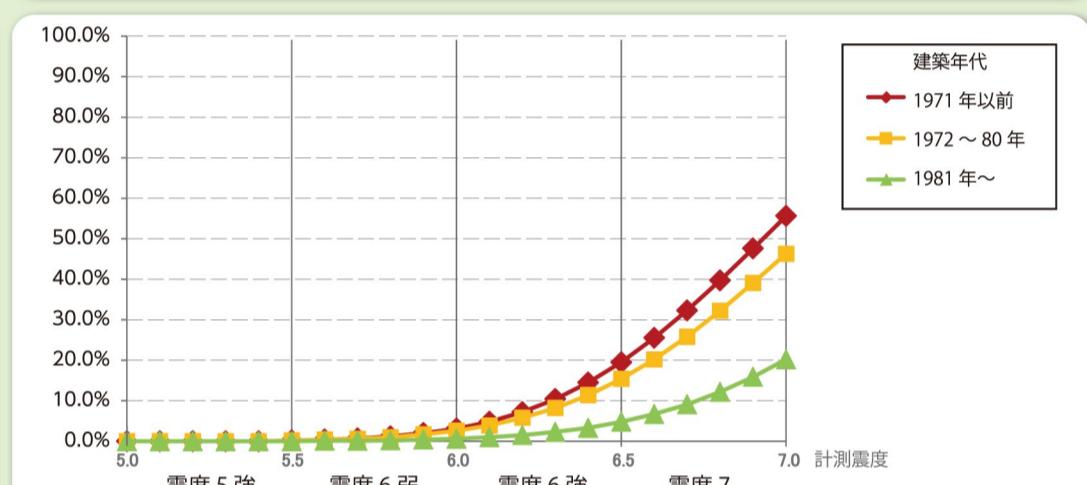
危険度マップは下図のように、阪神・淡路大震災など過去の地震被害を参考にして、地域の建物の建築年代や構造(木造・非木造)と震度に応じた倒壊率にもとづいて、計算を行なっています。

非木造(コンクリート造や鉄骨造など)よりも木造の方が倒壊する可能性が高く、新しい建物よりも古い建物の方が倒壊する可能性が高いという設定になっており、危険度が高くなるほど、建物が受けける被害が大きくなる可能性が高くなります。

全木造率の関係と



全非木造率の関係と



耐震診断のススメ

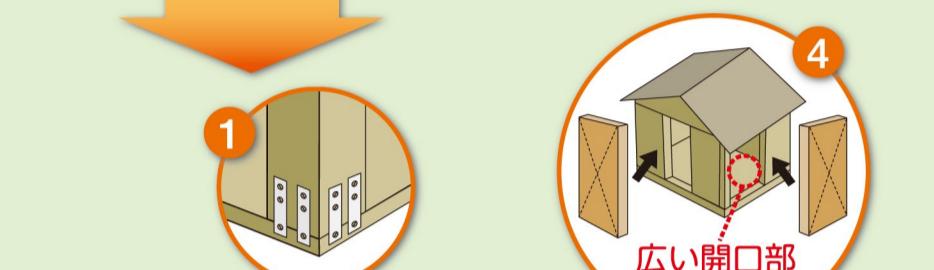
地震対策の第一歩は、自分の家の耐震性能を知ることです。大きな地震が起きたときに自分の家は大丈夫なのか、耐震診断を受けて確かめましょう。耐震性の判断には建築の専門知識が必要です。

安全でないと診断された場合は、適切な耐震改修工事を行なうことで安全性を確保できます。ここでは、耐震改修工事の主な方法を紹介しています。専門家に相談して自分の家に最も適した方法を選び、耐震改修工事を行ないましょう。

外見に異常が見られなくても、専門家による耐震診断を受けることが重要です。

①「接合部」の補強

接合部がどのように作られているのかを確認し、できる限り金物などでしっかりとつなぎ合わせるようにしましょう。



②「老朽・腐朽部材」の交換

老朽・腐朽部分は新しいものに交換しましょう。



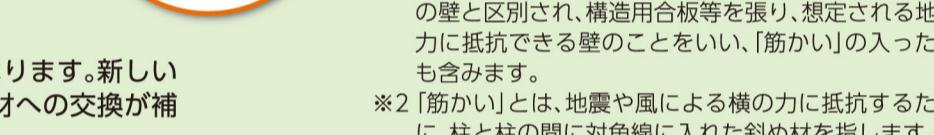
③「基礎・地盤」の補強

基礎や土台がしっかりしていないと、大きな地震時に、住宅が倒壊・破壊する危険性があります。基礎を補強して建物の耐震性能をあげましょう。



④「偏心」の検討

建物の片側の面に縁側やガレージなどの広い開口部が設けられて壁の少ない建物は、地震力を受けると建物がねじれることがあります。壁の無い側に耐力壁を設ける補強をして、建物全体のバランスを取りましょう。



⑤「壁」の補強

耐力壁^{※1}の数を増やすと建物は丈夫になります。新しい耐力壁の設置や筋かい^{※2}の追加、太い部材への交換が補強の確実な方法です。

*1「耐力壁」とは、単にボードを張っただけの間に切り用の壁と呼ばれ、構造用合板等で張り、想定される地震力に抵抗できる壁をいい、「筋かい」の入った壁も含みます。

*2「筋かい」とは、地震や風による横の力に抵抗するために、柱と柱の間に対角線に入れた斜め材を指します。

